



炭鉱住宅(浦幌炭鉱/弥生町)

## URAHORO-Town

浦幌町



ベルト斜坑(尺別炭鉱)

## ONBETSU-Town

釧路市  
音別町



坑口と木製炭車(鹿路炭鉱)

## SHIRANUKA-Town

白糠町



トレバーナによる採炭(追分炭鉱)

## AKAN-Town

釧路市  
阿寒町



SD 採炭切羽(太平洋炭鉱)

## KUSHIRO-City

釧路市



斜坑の巻き上げ(太平洋炭鉱別保坑)

## KUSHIRO-Town

釧路町



山神祭(八千代炭鉱)

## AKKESHI-Town

厚岸町

COAL MINING HISTORY

釧路炭田

産炭史

# 釧路炭田での炭鉱のはじまり

もっとも古い釧路炭田の石炭の記録は、松前藩主松前邦広の子、長広による「松前志」（1781年）「タキイシ此物東部クスリヨリ出ツ、黒ウシテナメラカナリ 燃ユルコト薪ノ如シ 大和本草ニ所載石炭ノ類ナリ」という記述です。「クスリ」は釧路のことです。

釧路炭田の石炭の開発は幕末、開国によってはじまります。箱館奉行の命で安政3（1856）年、オソツナイ（現 釧路市益浦「岩見浜」）での採炭を開始しました。北海道最初の石炭採掘です。開港した箱館（函館）に寄港する船、特にアメリカの捕鯨船に石炭を、薪や水、食料とともに供給するためです。翌年からは採炭場所はシラヌカ（現 白糠町「石炭岬」）へ移動し、その後7年間、本格的な採炭が行われました。

明治時代に入って、開拓史による鉱物調査が釧路でも実施され、石炭の埋蔵が確認されました。榎本武揚やライマンが訪れています。明治7（1874）年ころから海岸沿いでごく小規模な採掘が行われましたが、本格的な炭鉱は、明治20（1887）年、安田財閥の安田善次郎による「春鳥炭山（のちに安田炭砒）」がその最初です。アトサヌプリ（現 弟子屈町硫黄山）での硫黄生産のため、製錬や輸送のために石炭が使われました。明治29（1896）年にこの硫黄生産は終了しますが、その後も釧路港に入港する船に、また京浜地区へも運ばれて使われるようになりました。明治30年代後半になると、前田製紙（現在の日本製紙）や製材・マッチ工場などの自家発電、開通した官営鉄道（現在のJR）など、地元での消費も増えていきます。このころは別保、舌辛（阿寒）、昆布森、天寧、白糠でも採炭が行われています。



オソツナイ海岸の炭層



安田竪坑（明治40/1907年）

大正3（1914）年、安田炭砒は休山しましたが、その後、大正6（1917）年に台湾で炭鉱・鉱山や水産会社などを経営していた実業家、木村久太郎が買収し、「木村組釧路炭砒」とします。そして大正9（1920）年、別保の大坂炭砒、釧勝興業別保炭砒を買収していた「三井鉱山釧路炭砒」と合併、「太平洋炭砒」が誕生します。一方、その前年の大正8（1919）年に北海炭砒鉄道が設立されました。舌辛村（いまの釧路市阿寒町）の雄別で炭鉱開発を行い、その後三菱鉱業に買収され「雄別炭砒鉄道」となります。

大正時代からこのあと昭和10年代前半は、釧路炭田での主要炭鉱が出揃った時代と見ていいでしょう。現在に至る歴史は、このあとの本文をご覧ください。

（石川 孝織）

## CONTENTS

釧路炭田での炭鉱のはじまり	2	・ 釧路市阿寒町	12
日本の主な炭田	3	・ 釧路市	14
石炭生産量の変遷	3	・ 釧路町	16
釧路炭田の主な炭鉱	4	・ 厚岸町	18
石炭の歴史などを学べる施設	4	釧路コールマイン	19
産炭史		ヤマのしごと・ヤマのくらし	20
・ 浦幌町	6	釧路炭田年表	22
・ 釧路市音別町	8	釧路炭田の出炭量と	
・ 白糠町	10	釧路機構（旧1市6町）の人口推移	23

# 日本の主な炭田

炭田とは、経済的に価値のある炭層が豊富に存在する地域をいいます。

石炭は、湿地帯に繁茂していた植物が枯死後に、空気から遮断された状態で堆積したものが地下へ埋没し、とても長い時間をかけ圧力と熱を受けた結果、形成されたものであると考えられています。このような作用を「石炭化」といいます。

ヨーロッパ、アメリカ、中国などの石炭は古生代石炭紀、約3億年前ころに堆積したのですが、日本は古第三紀以降、6500万年前よりも新しい時代のもので、釧路炭田も同様で、4500～3800万年前ころ堆積し、石炭となったものです。

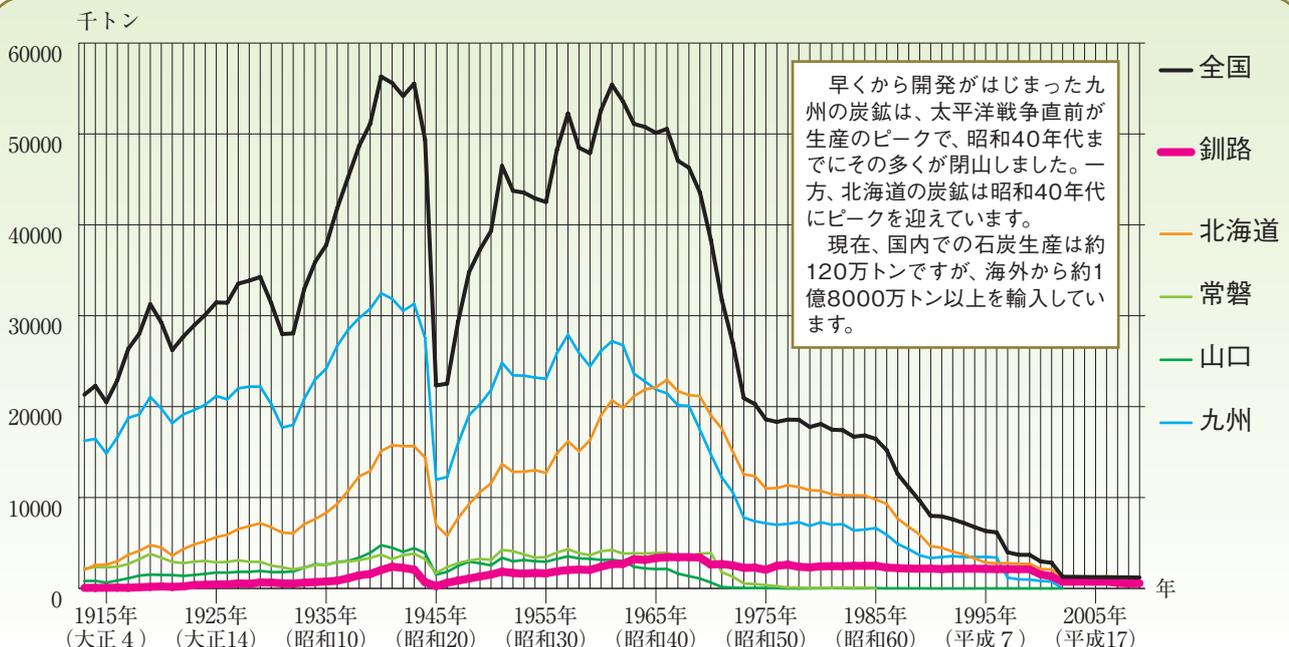
日本の主な炭田は、北海道、常磐、九州・山口地区に偏しています。炭質は、形成時代、受けた圧力と熱によって異なり、大嶺炭田の一部で無煙炭が、石狩炭田・三池炭田など多くの炭田では瀝青炭を産出します。釧路炭田では亜瀝青炭を産出し、非粘結性一般炭として、発電所やボイラー等で使用されます。

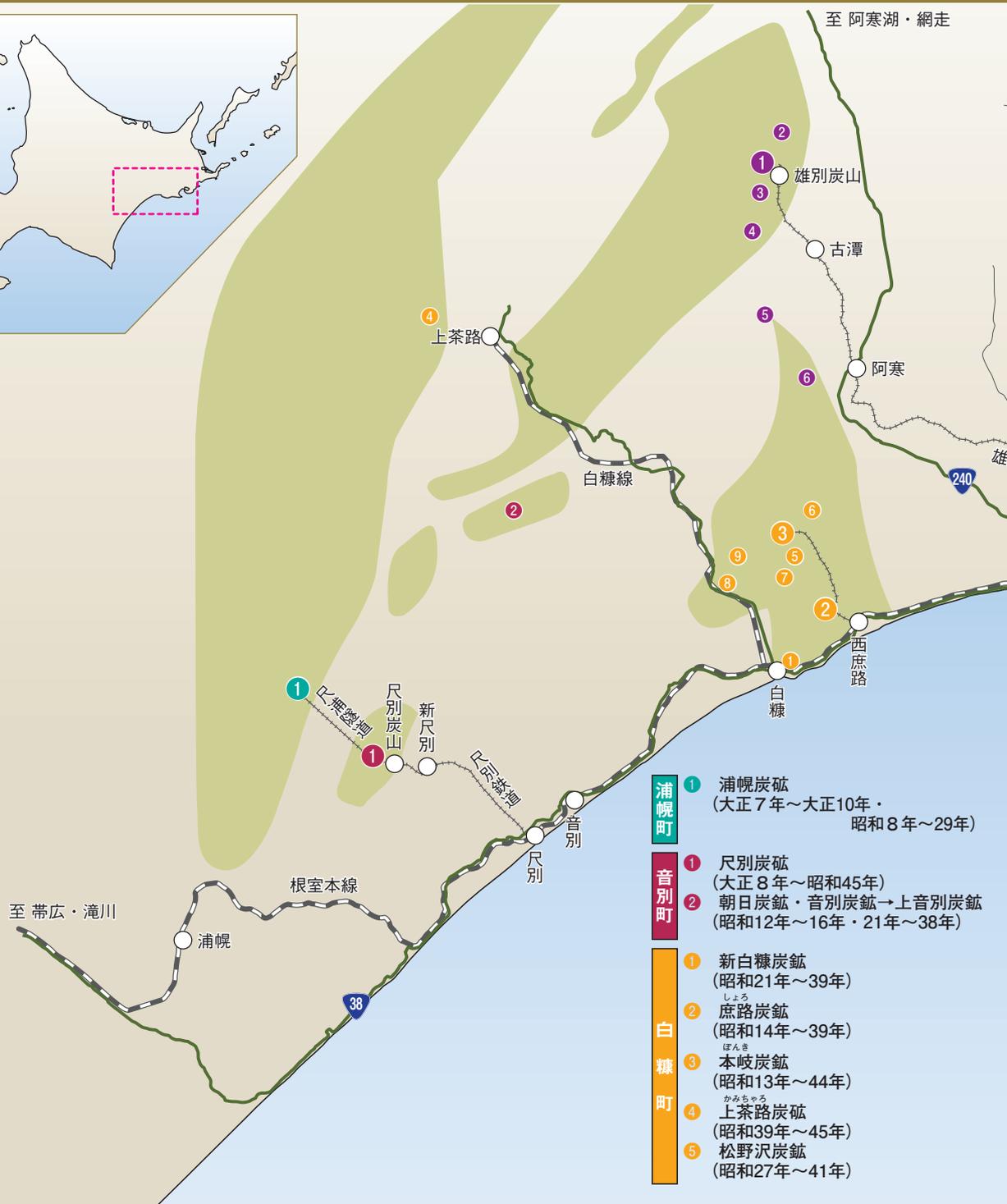
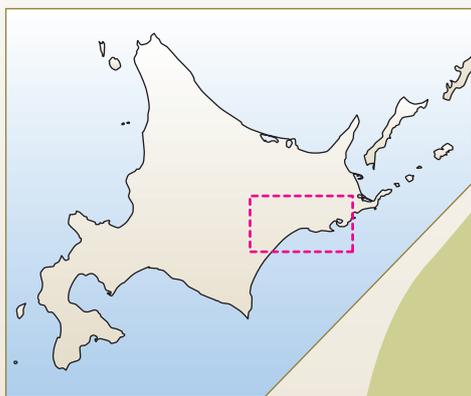
現在、国内には坑内掘りの釧路（釧路炭田）、露天掘りの砂子・三美・北菱美唄・新旭・東芦別・空知新（石狩炭田）・吉住（留萌炭田）の各炭鉱が稼行中です。

（石川 孝織）



## 石炭生産量の変遷





## 石炭の歴史などを学べる施設

### 太平洋炭鉱展示館

釧路市桜ヶ岡3-1-16  
TEL 0154-91-5117 (青雲台体育館)

入口に海面下約350mから掘り出された6トンもある日本一の大塊炭がお出迎え。圧巻は巨大な切羽 (SD方式による採炭・コンテナスマイナーによる掘進現場) が再現された模擬坑道もあり、石炭の生産について楽しく学べます。



水休み 入館料/大人 300円 子供 200円

### 太平洋炭鉱資料室

釧路市城山1-14-35 城山小学校内  
(受付 釧路市教育委員会生涯学習課 TEL 0154-31-4579)

太平洋炭鉱82年の歴史を収納する資料室。特徴は会社・労組双方の資料が同時に閲覧できること。膨大な資料を太平洋炭鉱OB (太平洋炭鉱管理職釧路倶楽部) が資料整理を行ってきました。なお、利用は事前に釧路市教育委員会に連絡が必要です。



平日のみ開室 (休校日除く)  
事前に申込が必要です 入室/無料

### 炭鉱と鉄道館「雄鶴駅」

釧路市阿寒町上阿寒  
「あかんランド丹頂の里」内  
TEL 0154-66-2331 (赤いペレー)

雄別炭鉱と雄別鉄道の歴史を豊富な資料・写真で学ぶことができます。約12分の映像資料もあります。また雄別鉄道で活躍した蒸気機関車C11 65も保存されています。なお同じく雄別鉄道の8722が釧路製作所 (釧路市川北町) に保存されています。



開館期間/4月下旬～10月 入館料/無料

# MAP OF KUSHIRO COALFIELD



凡例

- 数字 炭 鉱
- 古第三系 (夾炭層を含む地層)
- 国 鉄
- 私鉄・炭鉱専用鉄道
- 簡易軌道
- 主な道路

\*鉄道・道路は昭和39年現在

- |     |   |     |  |
|-----|---|-----|--|
| 白糠町 | <ul style="list-style-type: none"> <li>6 神之沢炭鉱 (昭和5年~18年・25年~37年)</li> <li>7 加利庶炭鉱 (大正3年~昭和13年・32年~34年)</li> <li>8 白糠炭鉱 (昭和8年~19年)</li> <li>9 茶路白糠炭鉱 (昭和23年~34年・35年~37年)</li> </ul>   | 釧路市 | <ul style="list-style-type: none"> <li>1 春鳥炭山 (安田炭鉱) → 木村組釧路炭鉱 (明治20年~大正3年・6年~9年) 太平洋炭鉱 → 釧路コールマイン (大正9年~現在)</li> <li>2 米町炭鉱 (坑口は太平洋炭鉱と共有) (昭和47年~48年)</li> </ul>                        |
| 阿寒町 | <ul style="list-style-type: none"> <li>1 北海炭鉱 → 雄別炭鉱 (大正8年~昭和45年)</li> <li>2 大曲炭鉱 (昭和30年~43年)</li> <li>3 然別炭鉱 (昭和31年~45年)</li> <li>4 鈴木炭鉱 → 増子炭鉱・古潭炭鉱 (昭和11年~18年・22年~30年)</li> <li>5 油谷雄別炭鉱 → 大和炭鉱 (昭和27年~37年)</li> <li>6 兵頭炭鉱 → 乙別炭山 → 沢口炭鉱 (明治36年~大正12年)</li> </ul> | 釧路町 | <ul style="list-style-type: none"> <li>1 別保山縣炭鉱 → 釧勝興業別保炭鉱 大阪炭鉱 → 三井炭山釧路炭鉱 (明治30年~大正9年~昭和24年)</li> <li>2 深山新坑 (昭和39年~47年)</li> <li>3 天寧炭山・東釧路炭鉱 (大正2年~7年・昭和25年~42年)</li> </ul>           |
|     |   | 厚岸町 | <ul style="list-style-type: none"> <li>1 厚岸炭鉱 (大正7年~昭和40年)</li> <li>2 青葉炭鉱 (大正6年~昭和40年)</li> <li>3 八千代炭鉱 (大正5年~昭和35年)</li> </ul> <p>鉱業権者、炭鉱名が著しく変わり坑口は時代と共に移動、詳細は不明炭鉱名は最終名称 (中断期間あり)</p> |

### 白糠炭田石炭資料室

白糠町西庶路東1条北1  
西庶路コミュニティセンター2階  
TEL 01547-5-3631

白糠町周辺の炭鉱位置図とそれぞれの歴史、庶路炭鉱の石炭層の地質見本、坑道掘進の再現コーナー、ヘルメット、カーバイドランプ、採炭道具などの備品類を展示。近くの公園に庶路炭鉱発祥の碑があります。

月、年末年始休み 入館料/無料

### 釧路市立博物館

釧路市春湖台1-7  
TEL 0154-41-5809

1階「釧路の大地」では釧路炭田の成り立ちが学べ、各炭鉱の石炭標本が展示されています。2階「釧路の近代」では、手掘りから昭和30年代ころまでの道具、「女子免状」などが展示されています。また、石炭をテーマにした特別展や講演会なども行われています。

月/4/29~11/3(除祝日)年末年始休 (詳細はお問合せ下さい)  
入館料/大人460円・高校生240円・小中学生110円

### 音別町ふれあい図書館2階 (郷土資料展示室)

釧路市音別町朝日2-81  
TEL 01547-6-2034

尺別炭鉱の資料などが展示され、ほかにも各種資料で馬産や酪農など音別町の基幹産業や歴史について学べます。展示室を見学する場合は、1階の窓口でお申し出ください。

月、祝日、第3土・日、年末年始休み  
入館料/無料

### 浦幌町立博物館

教育文化センター「らぼろ21」内  
浦幌町字桜町16番地1  
TEL 01557-6-2009

浦幌炭鉱の資料などを収集しているほか、浦幌の自然、歴史、生活、文化を大きな6つのコーナーに分けてわかりやすく展示しています。

月、祝日の翌日・年末年始休み  
入館料/無料

# 浦幌町

DATA

■人口／5,667人 ■面積／729.75km<sup>2</sup>

〈平成23年3月末 現在〉

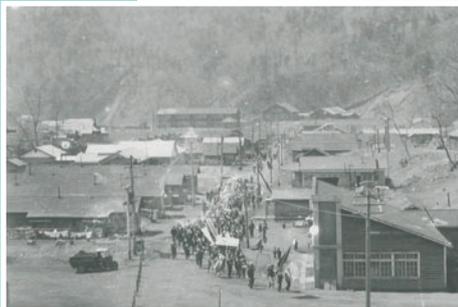
■産業・特徴／農林水産業の第1次産業が主体。観光面では136haという広大な面積をもつ「うらほろ森林公園」に、キャンプ場、パークゴルフ場、フィールドアスレチックなどがあり、緑に囲まれた自然の中の冒険王国です。留真温泉もリニューアルオープンしました。



尺浦通洞（尺浦隧道）



鉱員の出坑風景（双運橋）



メーデー行進と炭住街



浦幌炭砦の商店街（戦前）

## 明治・大正期・浦幌と石炭

浦幌炭砦発見の年は定かではありませんが、「浦幌炭砦変遷史」に「明治24（1891）年、十勝郡内数ヶ所に試掘の許可を得たものあり。28（1895）年古河家が探鉱。44（1911）年に古河鉱業株式会社が鉱区を設定、鉱業権者となる」と記載されています。その後、大正2（1913）年に平林甚輔が鉱業権を得て、大和鉱業を設立、6（1917）年末より浦幌～ケナシ間の軽便鉄道の敷設工事及び開坑事業に着手し、常室・留真、ケナシの3カ所に坑口をつけましたが、炭層の不安定・輸送施設の不備により操業不振が続き、営業採炭が行われたのはケナシ坑のみでした。ケナシから出炭するため、浦幌駅まで馬車軌道をつけ、営業販売に備えましたが大戦後の不況で大正10（1921）年には休山を余儀なくされたのです。

## 浦幌炭砦の本格的開発

昭和8（1933）年には再び大和鉱業によって開発が開始され、浦幌～太平坑（旧坑）間の鉄道敷設工事に着手するとともに、留真、ケナシ、ソーウンベツの3ヶ所に坑口を設け、それぞれ出炭を開始しましたが、留真及びケナシの炭層は断層による破碎や変形が甚だしく、採掘が非常に困難だったため、比較的炭層の安定していたソーウンベツ沢の双運坑に主力を置き操業を集約しました。

昭和11（1936）年10月、鉄道敷設工事の完成を見ないで、三菱鉱業の経営に移り、雄別炭砦鉄道雄別炭業所浦幌炭坑となりました。

この頃の石炭の搬出は、山元の選炭機より浦幌駅までの約26kmをトラック輸送を行っていましたが、その間には18ヶ所の橋梁があり、雨のたびに流失を繰り返しました。橋梁の維持で経営困難となり、大和鉱業は雄別炭砦鉄道へ移行したと伝えられています。当時は石炭の輸送手段確保が最も重要なことでした。

そして昭和12（1937）年10月には山元～尺別間の索道が完成、尺別炭砦まで搬出、さらに専用鉄道にて尺別駅まで運ぶようになりました。

以来、出炭は増し昭和15（1940）年度には18万5,700トンの出炭記録を樹立、更に17（1942）年には、尺浦隧道と尺別炭砦の総合選炭機、専用鉄道改善工事が完成、尺別炭砦とともに増産体制が整いました。

当時の交通は国鉄浦幌駅～山元（26km）を自動車（トラック）で往復するか、尺浦隧道（6km）を電車で行き、尺別炭山～国鉄尺別駅（11km）を結ぶ専用鉄道（所要時間40分）を利用していました。

なお、尺浦隧道は中間において直別川上流を抜けますが、この直別川を以て釧路国境となるため、行政面において十勝と釧路に分かれ、鉱業所として支障をきたすことが多かったそうです。

太平洋戦争の末期になると、海上輸送の途絶のため昭和19（1944）年8月政府の命により従業員や設備を九州地区の炭砦へ配置転換させられ、休山しました。

## 戦後の復興と閉山

終戦後の復興に石炭は欠かせず、九州等の炭砦に転換されていた従業員が次々と復帰し、昭和22（1947）年4月、資材入手難を克服して復興に着手。23（1948）年、出炭を再開し2万2千トン出炭まで回復し、朝鮮戦争景気で出炭量は増加の一途をたどったのです。24（1949）年には雄別炭業所の支坑から尺別炭業所の支坑に変わり、太平坑からの出炭も再開して、生産量は倍増しました。25（1950）年には、双運部落を中心に730戸の炭住があり、浦幌炭砦小学校に続いて中学校も設置、27（1952）年には生産量10万6千トンを記録、人口密集地の炭砦地域の若者たちのため高校分校（定時制）も建設されました。街には20店ほどの商店が軒を並べ、集会施設（協和会館）では、連日映画や芝居や歌謡会が行われ、戦前にも増して活気に満ちていました。

しかし、朝鮮戦争の休戦により急激に需要がなくなり、各ヤマでは大量の貯炭があふれ、終戦後未曾有の業界不況が到来した一方、坑内においても悪条件が重なり業績が上がらない中、昭和28（1953）年、政府が緊縮政策を強行したことによって各産業界は金融面を引締めざるをえなくなりました。浦幌炭砦もその余波を受け、出炭を制限し企業合理化経費の節約等の努力をしましたが、ついに昭和29（1954）年10月31日を持って閉山、12月3日坑内諸施設の全撤収を終了しました。

従業員はそれぞれ雄別炭砦鉄道の雄別、尺別、茂尻（<sup>もじり</sup>赤平市）の三山に配置転換され、新天地を求めたのです。

人口の激減によって、昭和30（1955）年には高校分校は浦幌市街地の高校へ継承されました。32（1957）年には浦幌炭山小、中学校も縮小されるにいたりしました。



鉄筋ブロック造りの住宅

## 再開の模索

昭和42（1967）年3月、通商産業省（現 経済産業省）は全国地下資源の実情をつかむため、石炭鉱業合理化事業団に調査を委託して留真地区の石炭埋蔵量の調査を行いました。

昭和50（1975）年に地表の調査と炭層の確認、翌年ボーリングが行われ、この地域全体で8000万トンの埋蔵量が確認され、うち3000万トンが経済的にも技術的にも採炭可能との調査結果が出されました。さらに、61（1986）年に太平洋炭砦が留真地区で露天坑を計画。翌年には、現地で地鎮祭が行われ、平成4（1992）年度まで道路と擁壁工事、資材運路、沈砂池などの工事が行われました。

当時はエネルギー源の安定確保など石炭が見直され、この露天坑での採炭は生産原価が安く、保安体制も万全なことから有望視されましたが、平成3（1991）年の国の「新しい石炭政策」は、一段と厳しい内容であったため開発が延期され、そして8（1996）年、太平洋炭砦は露天坑の開発を中止しました。

現在、浦幌炭砦跡地は木々が茂り、往時の姿はありませんが、十勝総合振興局森林室が旧市街中心部に東屋や遊歩道を整備、東十勝ロングトレイル活動協議会は、当時の炭鉱街を偲ぶ写真入り案内看板を随所に立て、旧炭山市街から留真温泉までの約17kmの林道をトレイルルートとして整備しました。今では、十勝管内唯一の炭鉱産業遺産として多くの見学者が訪れるようになり、小・中学校等の社会科見学の教育素材としても活用されています。

（佐藤 芳雄）

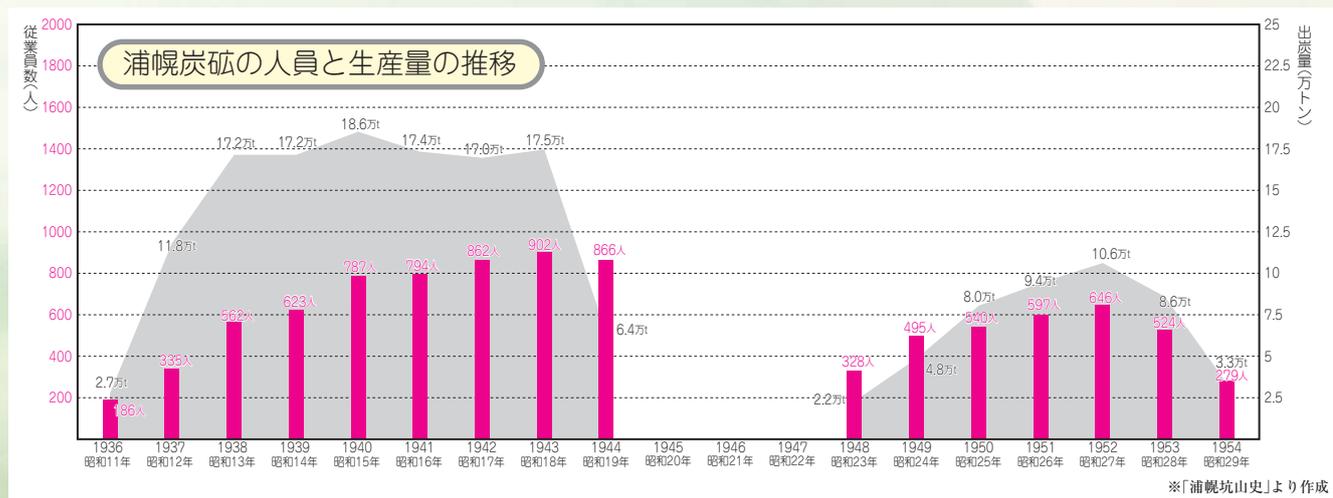


協和会館



炭山復興祭り

写真提供：谷崎由喜男・三浦直春



■人口/2,320人 ■面積/401.37km<sup>2</sup> (旧音別町地域) (平成23年3月末 現在)  
 ■産業・特徴/音別町は、釧路管内の最西端に位置しており、町域の84%を森林が占めています。平成17(2005)年10月の釧路市・阿寒町との3市町合併により、釧路市音別町となりました。基幹産業は、酪農業と林業が基盤となるほか、水資源や山菜などの地域資源を活用した産業も主体となっています。

## 草創のころ

大正7(1918)年に椎葉紀義が鉱業権を取得し、同年10月北日本鉱業により開坑したのが尺別炭砒の始まりで、翌8(1919)年には本格的に採炭事業に着手しました。当時は坑内員50人、坑外員40人ぐらいの規模で行っていました。

開坑当時、石炭の運搬は馬の背に頼っていましたが、根室本線にも尺別信号場が設置され(大正14(1925)年に貨物駅、昭和5(1930)年に一般駅となる)、大正9(1920)年からは山元から尺別岐線までの運炭軌道によって運搬され、ここで積み替えるようになりました。出炭量は、大正8(1919)年に4千トンだったものが、昭和2(1927)年には7万トンにまで伸びました。

しかし、大正15(1926)年の大凶作に端を発した不況の波は、昭和に入って「世界恐慌」と呼ばれ、ますます深刻の度を増し、小規模炭砒の経営は思うにまかせないものがありました。

## 時の風<sup>したが</sup>に順って



尺別駅の貯炭場(軽便鉄道の時代)

昭和3(1928)年に三菱鉱業が買収し、雄別砒業所の支坑としました。以来、炭砒住宅の建設、小学校校舎増築など次々に整備が行われるとともに、10(1935)年に奈多内坑を開坑、翌11年には大和鉱業から浦幌炭砒を買収し、索道で尺別へ石炭を運びました。さらに12(1937)年には、奥沢坑の開発に着手しました。

昭和14(1939)年、尺浦隧道(6km)の開削を開始、17(1942)年に完成します。同年、軽便軌道から専用鉄道へ変更する工事が完成し、根室本線と直結しました。また、当時「東洋一」と自慢した総合選炭場が完成し、尺別・浦幌両坑からの石炭がここで選炭され、16(1941)年には出炭は約42万トンとなりました。

炭砒住宅も、旭町、緑町、錦町の各地区に年を追って整備拡充されました。

こうした隆盛は、国策に基づく軍需の風が大きかったことは否定できません。

しかし太平洋戦争が激しくなり、石炭増産を図ってもそれを必要とする場所への輸送が思うようにまかせない状況から、閣議決定「樺太及釧路に於ける炭砒労働者、資材等の急速転換の件」により、昭和19(1944)年8月に休坑、九州の三菱鉱業系炭砒へ労働者を転換するに至りました。

## 復興から全盛へ

終戦後、昭和21(1946)年から採炭が再開されました。復興への尺別炭砒の人々の郷土愛に燃えた献身的活躍ぶりは後々まで語り継ぐべきことで「復興記念碑」が建てられました。またこの年、尺別炭砒労働組合の誕生をみえています。同年のGHQの財閥解体指令により、雄別炭砒鉄道は三菱鉱業より分離独立しました。24(1949)年、雄別砒業所より独立し、尺別砒業所となりました。

昭和28(1953)年、双久坑が完成します。この頃から生活環境や労働条件が良くなり、炭住街は、栄町地区の開発や錦町地区の拡充などが行われ、生産的にも生活的にも全盛の時代を迎えました。また、釧路湖陵高校定時制の教室が、尺別炭砒中学校の中に設けられました。

しかし、世相は戦後の傾斜生産における石炭の位置づけが、次第に「油主炭従」になってきているのも見逃せないことでした。

この頃から、石炭鉱業合理化五ヵ年計画により、全国的に閉山や規模縮小の兆しが現われはじめました。

しかし、尺別炭砒は昭和39(1964)年に南直坑開発に着手、41(1966)年、念願のベルト斜坑の完成など、ゆれ動く石炭産業の中で施設の充実を図ってきました。



24年祭の記念写真



選炭場・尺別炭山駅・総合事務所

## ヤマの灯は消えて

昭和37（1962）年、石炭鉱業調査団の答申に基づく石炭鉱業合理化政策が出され、尺別炭鉱でも合理化が図られてきました。

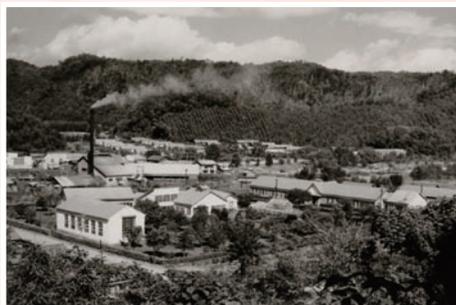
「ヤマの灯を消すな」と、町民一丸となって頑張ってきましたが、昭和44（1969）年の雄別炭鉱(株)茂尻炭鉱（赤平市）のガス爆発事故が、大きな打撃を与える結果ともなり、45（1970）年2月、雄別炭鉱鉄道は、第四次石炭政策による企業ぐるみの閉山で、従業員は全員解雇となりました。

こうして尺別炭鉱は、推定埋蔵量1億2千万トンともいわれる石炭を地中深く眠らせたまま開坑以来52年の歴史を閉じ、ヤマの灯は消えたのです。

同年12月までの間に尺別炭鉱地区内の住民のすべてが転出しました。昭和44（1969）年に8135人あった音別町の人口も、45（1970）年10月には4247人と半減してしまいました。

音別町は閉山後、企業誘致に力を入れ、大塚製薬などの工場が立地しました。

平成17（2005）年10月11日、釧路市、阿寒町と合併しました。



健保会館・病院・ボイラー  
遠くは錦町1丁目



新尺別駅



(市橋 大明)

神社山から緑町・栄町の社宅を望む

## 尺別炭鉱以外の各炭鉱について

### 田島炭鉱

- ・ヌブキベツと茶安別の合流地点に。
- ・大正9（1920）年、田島半六氏創業。12（1923）年、関東大震災の影響をうけ閉山。

### 朝日炭鉱、音別炭鉱、栄和産業上音別炭鉱

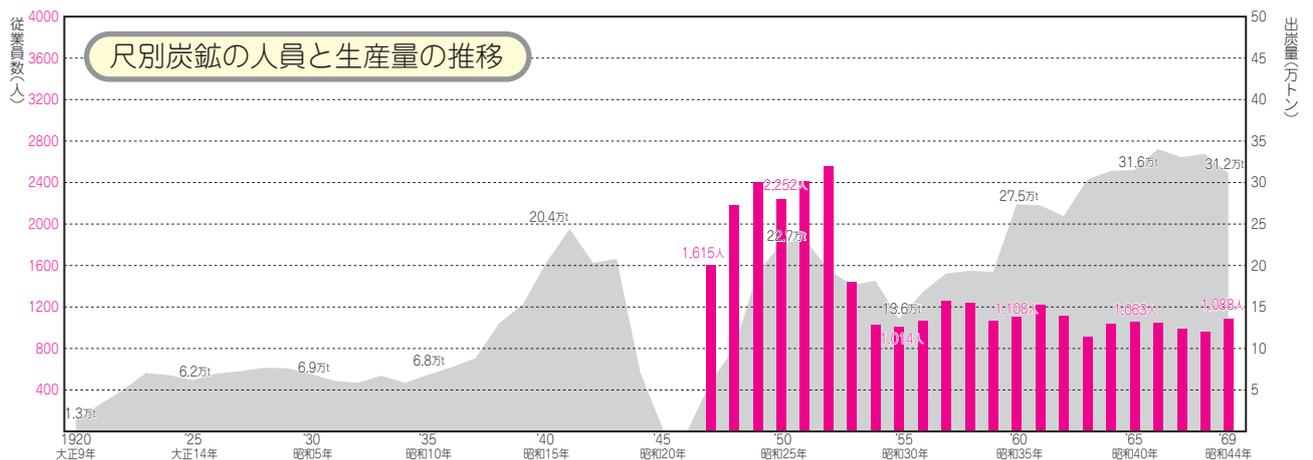
- ・本流地区。昭和12（1937）年に開坑、35（1960）年、2万6千トンの生産。38（1963）年に閉山。

### 茶安別炭鉱

- ・茶安別川の上流。新白糠炭鉱の経営。昭和36（1961）年開坑、39（1964）年、2万7716トンの生産。40（1965）年閉山。

### ムリ炭鉱、北菱炭鉱

- ・昭和32～36（1957～61）年、46～48（1971～73）年コイカタムリで露天掘。



※「北海道炭鉱資料総覧」より作成

# 白 糠 町

DATA

■人口／9,560人 ■面積／773.75km<sup>2</sup>

〈平成23年3月末 現在〉

■産業・特徴／主な産業は、林業、酪農、漁業で、太平洋でとれる海の幸はもちろん、山菜の宝庫でもあります。また「紫蘇」の町としてもさまざまな商品開発にも取り組むなど、「食と食材」をキーワードに、「第一次産業の再興と振興」「健康づくり」「教育（意識改革）」を三本柱にした個性あるまちづくりを進めています。

## 白糠産炭史のはじまり

安政4（1857）年、幕府（箱館奉行所）は、箱館（函館）開港にともなう外国船への燃料供給のため、シラヌカのシリエト（現 石炭岬）に炭山を開きました。これが白糠での産炭創始であり、北海道での炭鉱開発の歴史的第一歩でもあります。

しかし、シリエトの石炭は、箱館まで船で運ばれたため、途中の揺れでくずれてしまうことが多く、炭質も徐々に低下したことから、外国船からしばしば不評を買いました。また、イワナイ（岩内場所 茅沼・現 泊村）に新たな炭山が見つかったことにより、白糠炭山はわずか7年間で閉山となりました。

その後年月を経て、明治30（1897）年、民間（肥田照作）の手でプシナイ（現 刺半地区）に炭山が開発され再び採炭が始まると、以後いろいろな企業によって白糠での炭鉱開発が進んでいきました。

## 戦争と石炭増産時代

明治30年代から大正期にかけての新坑開発により、白糠は、しだいに産炭地としての姿が見えるようになっていきました。そして、日中戦争がはじまった昭和12（1937）年からは、石炭需要の増大に向けて大手の会社が進出してくるようになり、その後の戦争拡大とともに増産に拍車がかかっていきました。

- ・昭和12（1937）年 三菱鉱業株式会社が石炭岬に鉱区を設定
- ・昭和13（1938）年 雄別炭礦鉄道株式会社が加利炭鉱を買収  
明治鉱業株式会社が庶路に採掘鉱区を買収
- ・昭和14（1939）年 明治鉱業株式会社が庶路炭鉱（西庶路）を開坑  
品川煉瓦株式会社が神之沢炭鉱を開坑
- ・昭和15（1940）年 ラサ工業株式会社の白糠炭鉱が開坑
- ・昭和16（1941）年 明治鉱業株式会社が本岐炭鉱を買収

しかし、戦争の広がりには炭鉱の人的・物的資源の不足をまねき、特に昭和16（1941）年に戦線が太平洋・アジア周辺におよんだ後は、一層深刻な状況となりました。政府は、弱小炭鉱の統廃合を進めるとともに、残る炭鉱も昭和19（1944）年には釧路炭田や樺太で休坑や保坑の措置をとりました。明治鉱業庶路炭鉱・本岐炭鉱の従業員は九州へ配置替えとなり、これにより白糠のヤマの灯は一時消えてしまいました。

## 戦後の復興期（昭和20年代）

昭和20（1945）年9月、明治鉱業は、九州に配置転換した従業員を帰還させ、保坑に指定されていた庶路炭鉱の操業を再開。翌22（1947）年には、休止していた本岐炭鉱も採炭を始めました。

この時代は、戦後復興のための石炭増産の動きの中で、政府により炭鉱内外の整備や機械化が推進され、庶路炭鉱でも本格的な機械化へ向けての前段階として、採炭切羽への鉄柱導入や炭壁の破碎、坑道重圧対策などの研究が進められました。さらに、炭鉱住宅街も、従業員住宅や病院が整備され、人員の増加にともなって炭鉱独特の地域社会がつくられていくこととなります。

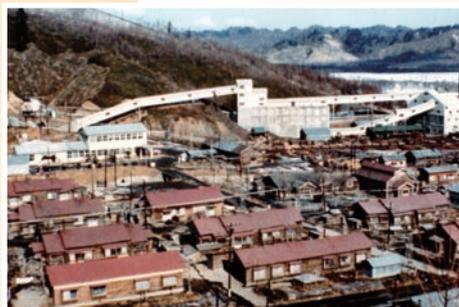
そして、昭和20年代は、旧坑跡地での開坑を含め新坑が次々と開かれ、白糠のヤマも復興期のエネルギー生産の一翼を担うこととなり、にぎやかな時代を迎えました（27（1952）年までに再開2坑を含め8坑が操業）。



空から見た庶路炭鉱（昭和30年前後）



庶路炭鉱 スリ山と建設中の立坑（昭和30年代前半）



本岐炭鉱の原炭ポケットと社宅（昭和40年代）

## エネルギー革命と閉山

町制が施行された昭和25（1950）年から30年代にかけては、30（1955）年の石炭鉱業合理化臨時措置法の施行により閉山ムードが高まるなか、白糠では新坑開発が続きました。これは、32（1957）年に着工した国鉄白糠線の開通を見込んでの、大手企業による開発計画を背景にした小炭鉱の乱立でもありました。

しかし、奥地開発（石炭と木材）を目的に進められてきた白糠線も、エネルギー革命の進展などによりなかなか開通にたどり着かず、さらに、石炭鉱業合理化臨時措置法の影響も出始め、昭和34（1959）年以降、白糠-上茶路間（25.4km）が開通した39（1964）年までに、小規模な炭鉱は相次いで閉山していきました。

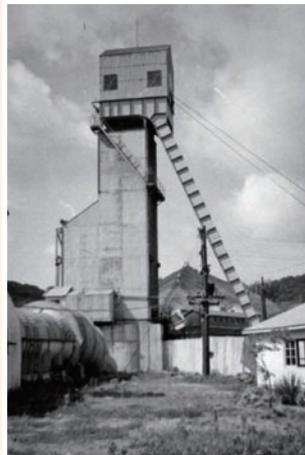
一方、白糠最大のヤマである庶路炭鉱は、昭和30年代に入って本格的な機械化に取り組み、採炭切羽の鉄柱、カッペ、パンツァーコンベアの導入を進めました。特に、36（1961）年に営業運転となった「立坑」（直径4.5m、坑口から坑底まで455.1m）は、原炭の巻揚げ、人員の昇降、排気の能率を高め、生産の向上に威力を発揮しました。

また、昭和38（1963）年、本岐炭鉱で導入された当時の最先端技術の一つであった水力採炭は飛躍的な成果をあげ、前年の10万100トンに対して21万トンを出炭し、その量は庶路炭鉱を上回るほどでした。

そしてこの間、明治鉱業は、昭和36（1961）年10月、庶路炭鉱から本岐炭鉱を分離して石炭鉱業合理化策に対応しますが、労働組合とともに町ぐるみで展開した存続運動のいかなく、庶路炭鉱は39（1964）年1月に閉山。本岐炭鉱も44（1969）年4月に閉山となりました。

このような中、国鉄白糠線が開通した上茶路地区では新坑として、昭和39（1964）年4月、雄別炭硯株式会社による上茶路炭硯が開坑しました。石炭輸送を白糠線が担い、上茶路地域には炭住街も形成されましたが、45（1970）年2月に閉山となり、安政年間から113年にもおよぶ白糠のヤマの歴史に終止符が打たれました。

そして、炭鉱閉山後は産炭地域の振興策として昭和48（1973）年、白糠町と釧路市の間（コイトイ地域）に石炭鉱業合理化事業団の資金を導入して「釧路白糠工業団地」を造成、企業誘致に取り組み、現在48の企業が進出しています。



明治庶路炭鉱の立坑（昭和36/1961年完成）

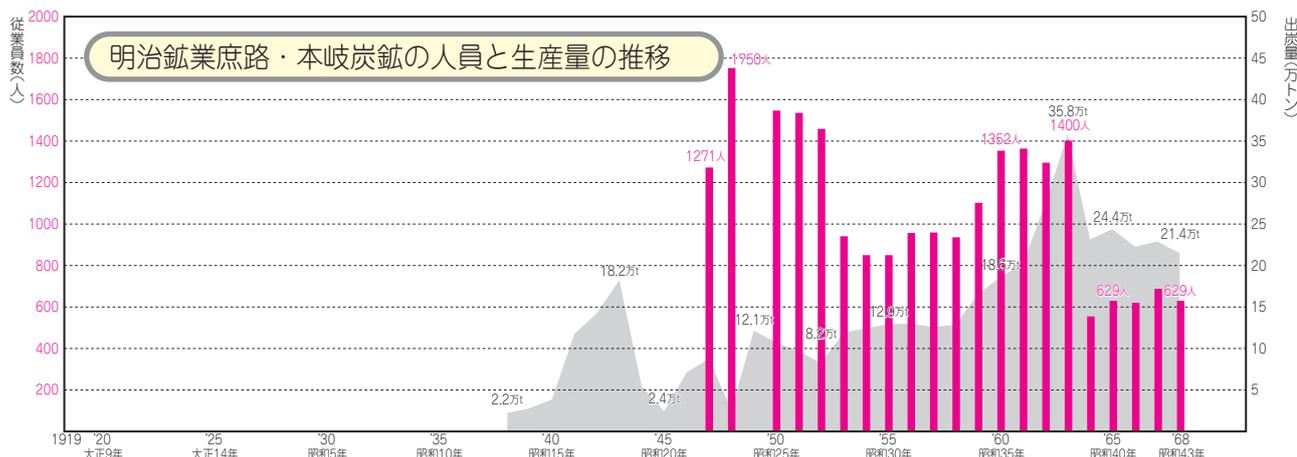


トラックでの石炭輸送  
（本岐炭鉱/昭和40年代前半）



白糠町公民館での住民大会  
（昭和43/1968年）

（竹ヶ原 浩司）



※「北海道の石炭」より作成

■人口／5,524人 ■面積／739.37km<sup>2</sup> (旧阿寒町地域) (平成23年3月末 現在)  
 ■産業・特徴／阿寒町の産業は、炭鉱閉山後、観光と農林業を基幹産業としており、大自然の阿寒国立公園をはじめ国の特別天然記念物「阿寒湖のマリモ」と「タンチョウ」が生息する町としても有名です。平成17(2005)年の釧路市・音別町との合併により釧路市阿寒町となりました。

## 明治期「創成期」

明治22(1889)年、北海道庁の釧路国地下資源調査で、本地域での石炭の存在が明らかになりました。

雄別地区：明治23(1889)年に田中彪が鉱区を取得しましたが採掘には至らず、29(1895)年に鉱業権は山縣勇三郎に譲渡され、小規模に採掘して、舌辛川をイカダで石炭を運搬しました。しかし、運搬手段の不備から39(1905)年に閉鎖しました。

舌辛(阿寒)地区：オトンベツの沢に、明治36(1903)年に兵頭炭鉱が開坑しました。39(1905)年に釧路炭乙別炭山に代わり、大正5(1916)年に沢口炭鉱が引き継ぎましたが、9(1920)年から休止状態となり、12(1923)年に閉山しています。山元から大楽毛まで、専用馬車軌道を敷設して石炭輸送をした、舌辛村(阿寒)で本格的に採掘した炭鉱でした。大正8(1919)年の出炭は6,027トンでした。

この地域は地表部の主に尺別夾炭層の採掘であり、深部には雄別夾炭層の石炭が未採掘で眠っています。



兵頭炭鉱での石炭運搬(明治末期)

## 大正期「多坑分散時代」

雄別地区は大正7(1918)年、芝義太郎らが鉱区をまとめ、翌8(1919)年「北海炭鉱鉄道株式会社」を設立しました。開坑と平行して石炭輸送目的の、雄別(大曲)～釧路間の鉄道敷設に着手し、12(1923)年には家族で赴任できるように私立雄別尋常小学校を設立しました(昭和8(1933)年、村立に移管)。同年、鉄道が開通して本格的に出炭できるようになりました。

しかし、同じく大正12(1923)年9月の関東大震災による石炭需要の落ち込みは深刻で、13(1924)年に三菱鉱業へ譲渡して三菱の子会社となり、社名を「雄別炭鉱鉄道株式会社」と改称しました。その後の出炭量は、増加の一途をたどります。

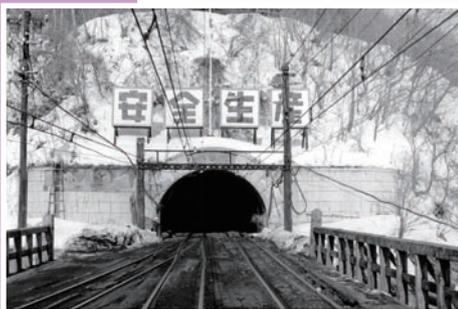


大曲選炭場と大祥内線の石炭列車(大正期)

## 戦前「坑口・施設の統合」

雄別炭鉱は開坑以来多くの坑口があり、諸施設も「然別地区・中ノ沢地区・大曲地区・大祥内地区」と分散していました。合理化のためには坑道を繋ぎ、坑口を一つにまとめる必要があり、昭和11(1936)年には各坑が一本の坑道で繋がり、13(1938)年には雄別通洞が完成して苔樋区域の採掘に着手しました。諸施設は中ノ沢地区(雄別地区)に集約し、以降の出炭は全て雄別通洞からで、大曲選炭場は閉鎖、同じ昭和13(1938)年に大祥内事務所は閉鎖、16(1941)年には大曲～雄別間の大祥内線も廃線としました。

戦前の最盛期の昭和16年(1941)は、出炭量66万4千トンを記録しました。19(1944)年から、戦時国策により従業員と設備の一部を九州の三菱系炭鉱へ転換され、雄別炭鉱は苔樋区域を保坑として旧本坑区域は閉鎖しました。



雄別通洞(昭和13/1938年開通)

北陽炭鉱：日本発送電株式会社(北電)が、自社で消費する石炭の自給目的で昭和15(1940)年に開坑、18(1943)年、坑道掘削段階で閉鎖しました。当時の出炭は800トンで、現地に2万3千トン野積み、昭和37～38年に2万トンの石炭をトラック輸送をしました。鉱業権は住友石炭鉱業に譲渡され、さらにその後、雄別炭鉱により開発計画中でしたが、閉山により北陽区域は未採掘区域となっています。

## 戦後「黒いダイヤ」

終戦後、苔樋地区(北進・二卸・堤沢)で操業を再開します。昭和21(1946)年に財閥解体により雄別炭鉱鉄道は三菱鉱業から分離独立しました。戦後、増産に努めた石炭産業は、朝鮮動乱が起こると特需景気によって石炭は黒いダイヤと呼ばれました。26(1951)年には従業員は3,000人を越え、出炭量は58万トンに回復しま



コールカッター(堤沢右6片上層払)  
(昭和26/1951年)

した。しかし石炭から石油へ、この石炭ブームは長く続かず下火となっていきます。28（1953）年には不況は深刻となり、最初の人員整理により、約800人が希望退職しています。

その他の炭鉱：この時期には戦時中休止していた炭鉱が再開し、多くの炭鉱が開坑していますが、いずれも小炭鉱で短期間で閉山しています。

●シュンク舌辛川「鈴木炭鉱→増子炭鉱→古潭炭鉱（昭和11～30年）・赤堀炭鉱（不明）・栄炭鉱（昭和11～31年）・日宝炭鉱（不明）」●侍の沢「大黒炭鉱（昭和30～32年）」●知茶布の沢「阿寒炭鉱（昭和26～33年）・知茶布炭鉱（昭和27～29年）・油谷雄別炭鉱→大和炭鉱（昭和26～37年）」●阿寒地区のオトンベツ沢「新雄別炭鉱（不明）・舌辛炭鉱→旭炭鉱（昭和2～6年以降）・新白糠音別（オトンベツ）左沢炭鉱（不明）」。



雄別通洞前の棧橋から  
(昭和42/1967年ころ)

## 企業努力むなしく「企業ぐるみ閉山」

昭和30（1955）年には石炭鉱業合理化臨時設置法が出され、スクラップアンドビルド政策が進み、能率の悪い炭鉱は次々と閉山していきます。34（1959）年に雄別炭硯鉄道は鉄道部門を分離して「雄別炭硯株式会社」と社名を変更しました。

昭和35（1960）年から希望退職による人員整理、機械化の推進による合理化を進めます。37（1962）年には北進から更に北西に「奥雄別通洞」を開削して、奥雄別地区で採掘を開始して発展していきます。合理化の成功により、昭和39年には出炭量72万6千トン（出炭能率50トン／人・月）を記録して、優良炭鉱となりました。

しかし、昭和45（1970）年、経営が悪化して年度末の決済が困難となり、奥雄別から約4km地点の北陽地区の開発費が政府から得られず、無理に延命してもあと数年と判断して、雄別鉄道を合併し「雄別炭硯鉄道株式会社」と名称を戻し、同年2月末に体力を残したままの企業ぐるみ閉山をしました。

かつて、1万2千人が住んでにぎわった炭鉱街も、いまは雄別地区は無人の原野に戻り、布伏内地区にわずかに約170人（平成23年）となりました。

村井建設：雄別炭硯の租鉱権<sup>（租）</sup>で採掘した「大曲炭硯」（昭和30～43年／昭和33年の出炭88,200トン・「然別炭硯」（昭和31～45年／昭和35年の出炭107,180トン）があります。

然別炭硯は、昭和45（1970）年10月に閉山、これで阿寒町から全ての炭鉱が消えました。

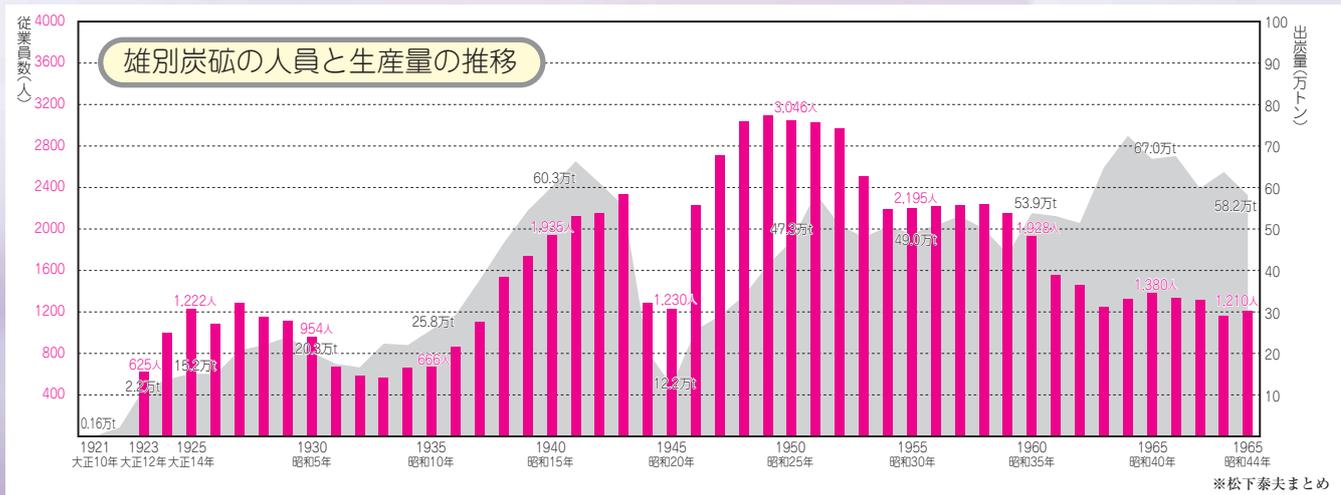
（松下 泰夫）



雄別炭硯中心施設群 選炭場、総合ボイラーなど  
(昭和44/1969年ころ)



山神祭 神社前広場にて（昭和43/1963年）



# 釧路市

DATA

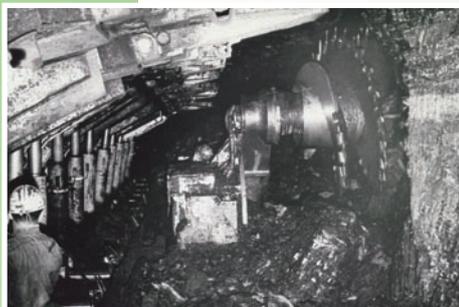
■人口/184,116人 ■面積/1362.75km<sup>2</sup>(旧釧路市/221.56km<sup>2</sup>) (平成23年3月末 現在)  
 ■産業・特徴/道東の中心都市として、石炭・水産・製紙の三大基幹産業により発展してきた釧路市は、たんちょう釧路空港・釧路駅を玄関とする道東観光の拠点でもあります。整備拡充が進む釧路港には大型客船も多く入港しています。またサンマやサケ、シシャモに代表される新鮮な魚介類に加え、そば・釧路ラーメン・釧路ザンギなど、グルメの宝庫です。



木村組炭鉱時代の坑口と炭車  
(大正7/1918年ころ)



機械化のさきがけ、ローダーとシャトルカー  
(昭和25/1950年)



シールド枠とドラムカッターの組合せによるSD採炭方式  
(昭和42/1967年)

## 太平洋炭砒の誕生

第一次世界大戦中の大正6(1917)年、台湾総督府のもとで金山、炭砒など砒山事業を手がけていた木村久太郎は、翌7年、休止中の安田炭砒を買収し、木村組釧路炭砒として操業を開始しました。その後、9(1920)年、隣接する三井砒山釧路炭砒(別保坑)との合併により「太平洋炭砒株式会社」が誕生しました。

## 戦時景気で増産 戦争激化で九州転換

昭和10(1935)年代初期、満州事変がもたらした好景気は石炭産業にもおよび、太平洋炭砒では30万トン台の高出炭を記録しました。選炭工場から知人の貯炭場までは釧路臨港鉄道の石炭専用列車が増強され、南埠頭においては船舶への石炭積み込み施設の建設が進みます。14年(1939)9月には、貯炭場から新設石炭ローダーまでの間、750mがベルトコンベアーで結ばれ、石炭船まで直接積み込みが可能になり全て自動化されました。

しかし、太平洋戦争が激化すると海上輸送が困難になり、昭和19(1944)年、政府の方針により釧路炭田の炭砒は保坑・休坑となり、太平洋炭砒の労働者も春採坑は九州の三井三池砒、別保坑(現 釧路町)は同じく三井田川砒に配置転換(いわゆる急速転換)となりました。このことにより釧路炭田の各炭砒での本格的生産は太平洋戦争終結まで休止となりました。

## 戦後復興を急ぎ、海底下採掘を決断

戦後、太平洋炭砒は陸地部はすでに枯渇状況にあり、海底下の採掘を模索していました。昭和21(1946)年5月に春採坑は海底下に向け採掘開始、22(1947)年8月、太平洋炭砒初の海底下でのロング採炭が開始されました。同時に、社運をかけた興津坑開発が始まりました。別保坑は興津坑の開坑により24(1949)年操業を停止、労働者は全て春採坑と興津坑に移籍しました。この海底下採掘への決断が日本の坑内掘り炭砒として最後まで操業し、釧路コールマインに継続できた理由の一つでした。

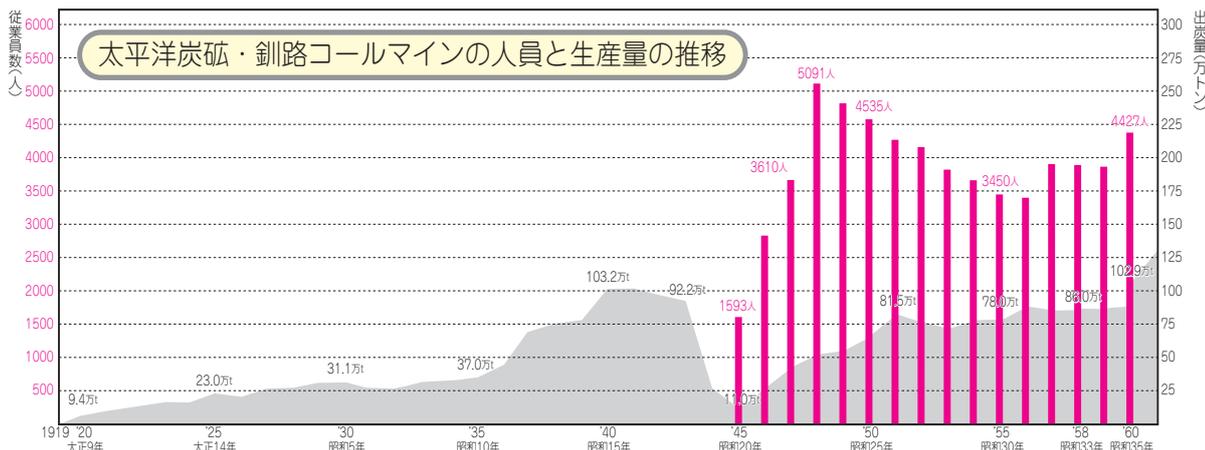
また、長期存続の要因として労働組合の存在があります。太平洋炭砒の労働組合は、戦後まもなくの昭和21(1946)年、同業他社の組合と異なり、職員と砒員が一緒の組合(職労一本)を発足させ、良識ある労使関係を持続させました。

この間、採掘機器の輸入・開発・改良による生産効率化と福利厚生全般の向上を図り、日本一の「機械化炭砒」、そして「福祉炭砒」と言われるようになりました。

しかし、残念ながら昭和29(1954)年8月に発生したガス爆発による大災害は、39名の尊い人命を失いました。この事故は労使に多くの反省や教訓をあたえ、その後の労使の行動指針は、「保安第一」という保安重点主義が共通語となりました。

## 石油との競合に新鋭機器で対応

昭和30年代後半には「エネルギー革命」の進展により石油との競争は激化しました。太平洋炭砒ではこれに対応して38(1963)年、春採坑と興津坑を統合し、近代



的総合繰込所の新築とあわせて坑口を一本化、入昇坑の効率化を図りました。さらに坑内外において新鋭機器の積極的開発輸入を進め、35（1960）年以降、採炭部門ではホーベル（炭壁剥離機）、支柱の水圧鉄柱化、掘進のコンテナスマイナー（坑道掘進機）などの高性能機器を導入しました。また、これら新鋭機器の導入を見越し、25（1950）年には高校卒新入社員の35名を第1期オペレーターとして養成中でした。後にこれら若手社員が新鋭機器の操作に縦横に活躍しました。

さらに、42（1967）年から天盤と後方を支えるシールド枠（S）とドラムカッター（D）との組み合わせによる「SD採炭」方式を採用、この画期的採掘方法により、52（1977）年には創業以来の出炭新記録261万トンを出炭しました。一方、送炭関係では平成元（1989）年、石炭を坑内から坑外の選炭工場まで直接運ぶベルトコンベアーが完成。7（1995）年には新坑口を開設計世界最長の約7,000mを運行する巻揚機を導入、稼働時間の確保と大幅なコストダウンを図りました。



春採駅構内のSLと石炭列車  
(昭和32/1957年)

## 予防保安・社員教育と福利の自主管理

太平洋炭砒では、昭和44（1969）年、保安の重点を各職場に置く「チーム会議制度」を発足させました。この制度は安全委員がリーダーとなり、自主的に災害対策、予防保安を行うもので、より身近な実践会議として従来にも増して保安向上に貢献しました。また社員教育を充実させるため、51（1976）年「教育訓練課」を新設し（後の研修センター）、保安・技術両面にわたり充実を図りました。

一方、組織的には昭和40年（1965）年、人事制度の改革を断行、従来の「職員」「鉱員」の二元的身分制度を解消し、呼称を社員と改め職務区分による等級管理とし、併せて賃金は月給制度を実施しました。また、福利厚生面では37（1962）年、「持ち家制度」を発足させ社員の定着、定年後の生活安定を図り、さらには45（1970）年、社員対象の「人間ドック」、主婦の「奥様ドック」を実施し、家族ぐるみの健康管理など生活面の意識改革をはかりました。その後、これら福祉部門では労使の共同出資による自らが管理運営する「太平洋炭砒福祉組合」を設立しました。



神輿渡御 春採坑坑口で（平成元/1989年頃）

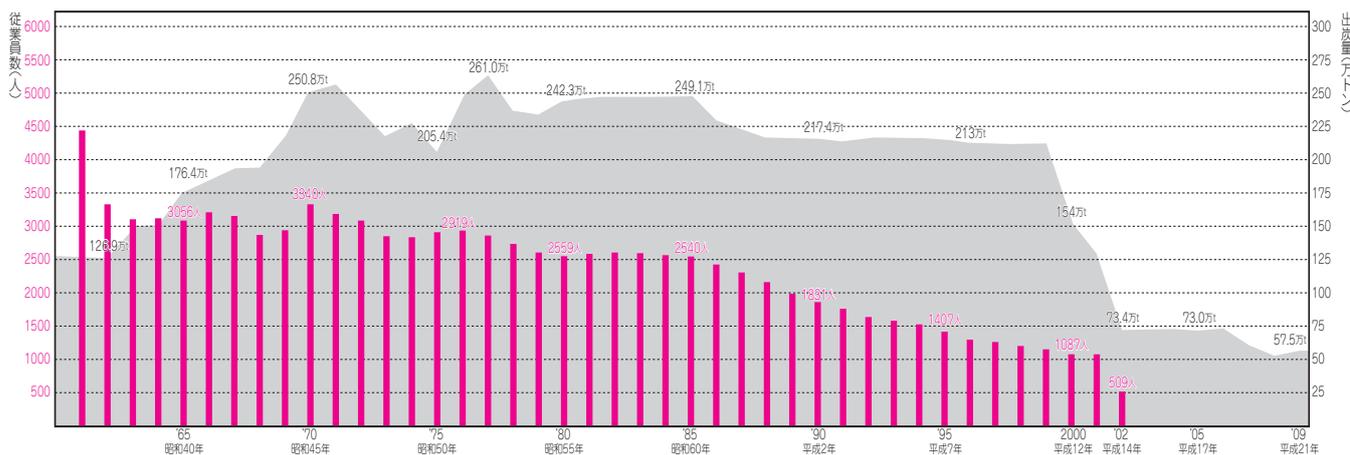
## 閉山、そして釧路コールマインへ

戦後日本の復興期の一翼を担い、一時は黒いダイヤとまで言われた石炭も、エネルギー資源の変革と安価な輸入炭により国内炭は撤退を余儀なくされ、政府の石炭政策の中で相次ぎ閉山しました。太平洋炭砒では、労使の共同目標である長期存続に向け、労働態様の改革、技術の海外移転協力などあらゆる努力を重ねてきましたが、平成14（2002）年1月30日、国内最後の坑内掘り炭鉱として、大正9（1920）年の開坑以来、82年の歴史に幕を閉じ、後事を釧路コールマインに託しました。



坑内での昼食（平成3/1991年）

(坂田 元・佐藤 富喜雄)



# 釧路町

DATA

■人口/20,864人 ■面積/254.12km<sup>2</sup>

〈平成23年3月末 現在〉

■産業・特徴/主な産業は、農業・漁業の第1産業で、農業では、冷涼な気候を活かし栽培される「ほくげん大根」が、首都圏を中心に数多く出荷されています。また漁業では、太平洋沿岸の良質な昆布や鮭、カキの他、数多くの魚介類が水揚げされています。一方で、大型小売店の出店を契機に、その周辺では一大商業圏が形成されています。

## 別保炭砒の採掘 山縣炭砒参入で本格化

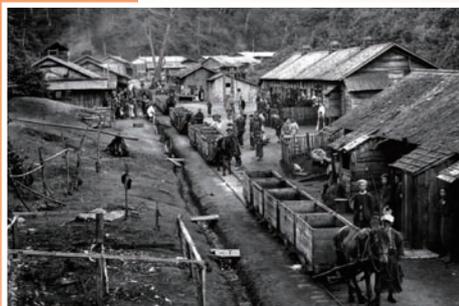
釧路地域、特に釧路村（現在の釧路町）の別保炭砒は、明治17（1884）年春、釧路川の支流別保川の上流地点で、別保国有林において角材造成中に露頭炭が偶然発見されたことによるとされています。また一方で、明治初期にオビラシケの「石炭のさわ」と称される付近で、札幌炭砒による採掘が別保地域の石炭採掘の始まりともされていますが、こちらは詳しい記録がなく、不明となっています。

別保炭砒の本格的な採掘は、明治29（1896）年、山縣勇三郎による山縣炭砒の創業によります。山縣勇三郎は、肥前平戸（長崎県）の出身で、当時は、別保の国有林の払い下げを受け、山縣牧場を経営していました。山縣炭砒の出炭は好調で、当時、春採（現在の釧路市）で採掘中の安田炭山と双壁をなし、40（1907）年の生産量は、安田炭砒の19,617トンに対し、山縣炭砒は20,443トン、また、同時に経営していた昆布森炭砒も8,147トンの生産を上げ、むしろ安田財閥が経営する春採炭山を大きく上回っていました（「釧路之現勢」明治40年）。

明治41（1908）年、山縣がブラジルへの移民を決めたことにより、これらの炭砒は同族の釧勝興業へと引き継がれました。

一方、別保のクツタクンベ川（双河辺川）の南丘陵地では、明治39（1906）年、大阪から進出してきた大阪炭砒が、大阪炭砒を開鉱しました。この年の出炭量は、2,419トンでした。

当時の採掘方法は、機械設備がなかったことから、全て手掘採炭によるもので、道具は、ツルハシ、スコップという、いわゆる“たぬき掘り”でした。採掘された石炭の搬出は、スラ箱（そりに箱を乗せる）で行われ、働き手には、親子、兄弟はもちろんのこと、夫婦で働いていた人もいました。



三井鉱山釧路炭砒の馬車軽道  
（大正5/1916年頃）



大阪炭砒の選炭設備（明治43/1910年頃）



別保～春採間の通勤列車内  
（昭和28/1953年頃）

## 炭砒のくらし 楽しみはヤマの祭

大阪炭砒は、明治44（1911）年には年産3万トン、従業員も事務員20名、坑夫および雑夫160名の合計180名にも達し、5月の山神祭の当日には、双河辺特別教授所（後の小学校）の落成式を挙行、また、坑夫の慰安所（倶楽部）も同時に設立し、図書、囲碁、将棋などの教養娯楽を楽しむ従業員で賑わったと言われます。当時の炭砒集落はクツタクンベ川の流域にあり、一帯を元山と呼んでいました。なかには、「千島」「樺太」と呼ばれる長屋（社宅）もありました。その名は、大方の坑夫が東北出身が多く、「北の最果ての地」になぞらえて、そう呼んだといわれています。また、長屋は8畳1間に流しのついた板間、狭くて畳もなくゴザを敷いただけで、「まるで馬小屋でないの」と、住む人を嘆かせたようです。

それでも近所づきあいは楽しく、お互い足りないものを融通しあうなど、まるで兄弟、親戚の付き合いのようでした。楽しみはヤマ祭り、盆踊りなど全山あげて夜中まで楽しんだようです。

## 三井鉱山の進出と太平洋炭砒の誕生

大正3（1914）年7月、釧路の安田炭砒が全面的に休山したため、大阪炭砒は一層の増産を求められ、事業は次第に拡張されました。このころ釧路地方の石炭に目をつけていた三井鉱山は積極的に参入を図り、5（1916）年、大阪炭砒を35万円で買収し、同年3月から三井鉱山「釧路炭砒」として開業しました。大阪炭砒の操業期間は、14年間でした。

当時の石炭輸送は、元山から馬鉄（馬車鉄道）で別保川まで搬出、別保川からは、10トン積みの川船（冬期間は馬籠）で、釧路市の幣舞橋たもと（現在の道東経済センタービル付近）で陸揚げ後、台船で本船に積み込まれていました。

日本の大財閥である三井の手に移った釧路炭砒は、田辺儀助（三井田川鉱〔福岡県〕の立坑建設の技術者）を初代鉱長として事業の整備拡張を急ぎ、採掘機械の導入を推進しました。

このころ、隣接する釧路市の木村組釧路炭砒との間に合併交渉が成立し、大正9（1920）年4月、太平洋炭砒の誕生をみます。三井鉱山「釧路炭砒」は、太平洋炭砒「別保坑」となりました。合併直前の同年3月、かねてから交渉中の釧路興業別保炭砒を25万円で買収しました。

三井鉱山が買収した釧路興業別保炭砒は、その後「追珠坑」として操業しましたが、その翌年、大正10（1921）年6月には休山し、勤務者100名は双河辺の本坑に転換されました。明治41（1908）年の操業以来12年間、別保地域での最初の本格的炭砒として始まった前身の山縣炭砒の29（1896）年から加えると、24年間の採掘の歴史でした。



別保坑選炭場（昭和15/1940年頃）

## 戦争で九州に転換 再開わずか3年で春採坑へ移転

太平洋戦争の激化に伴い制海権を失ったことから、船舶による石炭輸送ができなくなったため、昭和19（1944）年夏、別保坑の労働者は、一部の保安要員を残し、九州の三井鉱山田川鉱業所に転換しました。

三井鉱山別保炭砒の初代鉱長であった「田辺儀助」の故郷ともいべき三井田川鉱への移転は、何か運命的な因縁を感じます。この時期800人を数えた朝鮮人労働者も同時に転換しました。

別保坑は、終戦後の昭和21（1946）年11月に再開されましたが、鉱区の衰退、採掘条件の悪化などから、24（1949）年閉鎖となり、全員が釧路市の春採坑に移動しました。

戦後の再開からわずか3年間の操業でした。当時の従業員は約700人で、家族を含めた3,000人あまりの集団移転には、6年間に要しました。移転完了の昭和30（1955）年までの間、別保炭砒の岐線から根室本線上別保駅（現別保駅）東釧路駅を經由し、釧路臨港鉄道春採駅までの通勤列車を運行しました。

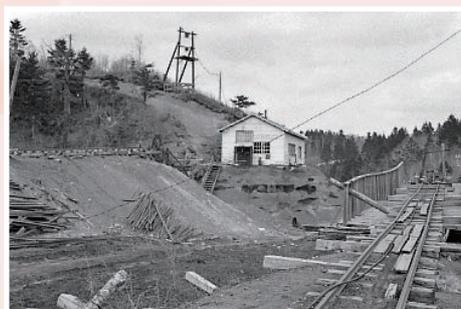
釧路町地域には明治から大正、昭和にかけて多くの炭砒がありました。代表的な炭砒を上げると、東釧路炭砒（天寧）、東別保炭砒（オビラシケ）、跡永賀炭砒などがあり、これらは昭和30年代後半には全て閉山しました。

別保坑の閉山後は、太平洋炭砒の傍系会社「栄和産業」が残炭処理を兼ね、昆布森地区で「深山坑」を昭和39（1964）年に開発し、46（1971）年にはパンツァーコンベアの導入により切羽運搬を始め、月産60トン台の出炭をみるまでになりました。しかし、47（1972）年、出炭のコスト高、大型機械の導入困難などの理由から、釧路村（当時）からの存続要望の甲斐もむなしく閉山が決定され、別保地域の炭砒は全て姿を消すこととなりました。

これにより、明治29（1896）年からの本格的な山縣炭砒の開業以来、釧路町内の炭砒は実に76年にも及ぶその永き歴史に幕を降ろすこととなったのです。

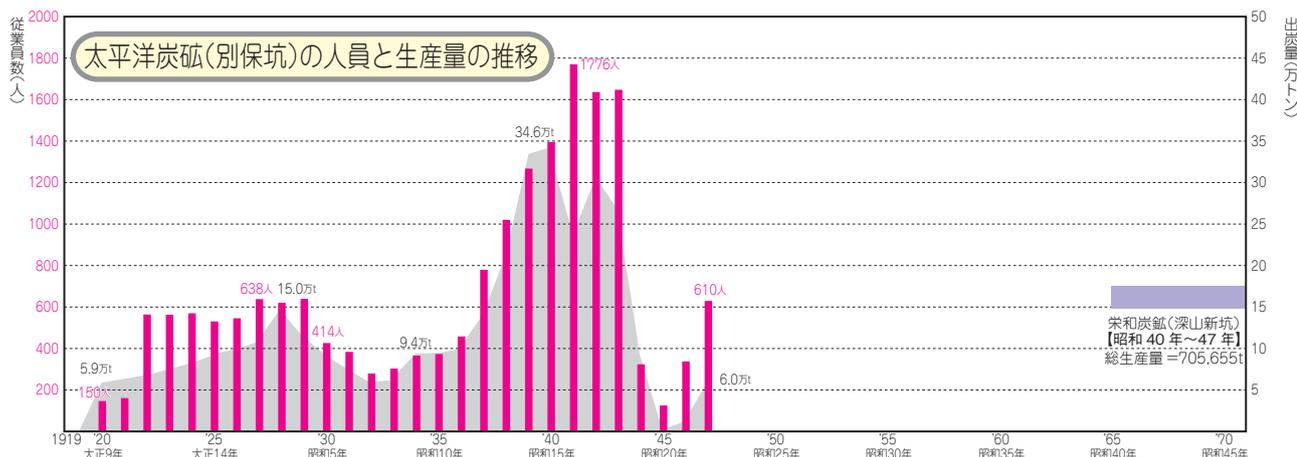


別保坑の住宅群（昭和21/1946年頃）



栄和産業深山新坑（昭和43/1968年頃）

（久保田 康生・佐藤 富喜雄）



※「釧路町史」より作成

# 厚岸町

DATA

■人口／10,654人 ■面積／739.07km<sup>2</sup>

〈平成23年3月末 現在〉

■産業・特徴／厚岸町の特性を最大限生かした沿岸漁場開発や栽培漁業など、資源管理型漁業の推進を積極的に行っています。また、生産性と収益性が高く、かつ環境に調和した酪農業の確立、観光資源の新たな開発など、活力ある産業の基盤作りに意を注いでいます。



太平洋炭砒新尾幌坑の社宅  
(昭和18/1943年)



上尾幌大東炭砒の入坑式



大東炭砒（のちの日東炭砒）の選炭場

## 鉄道開通を機に本格化

厚岸町の市街から直線で約20km西に位置する上尾幌<sup>かみおぼろ</sup>では、明治44（1911）年に霧多布の田中長之助が鉱業権を取得していましたが、採掘はされず、大正6（1917）年の釧路〜厚岸間の鉄道開通を機に本格的に開坑されました。同年には旭炭砒・八千代炭砒が開坑し、翌年には、後に青葉炭砒となる尾幌炭砒で採掘が開始されます。他の2砒を含め5つの砒区がありましたが、各炭砒は12〜23人の人員で、出炭量も1,000〜3,000トン程しかありませんでした。また、市街から約9km北東の糸魚沢炭砒は上尾幌の炭砒より古く、明治12（1879）年頃からたびたび試掘されていましたが、炭層の薄さと炭質不良から長続きせず、小規模ながら採炭を開始したのは昭和8（1933）年以降で、10年ほど操業しました。

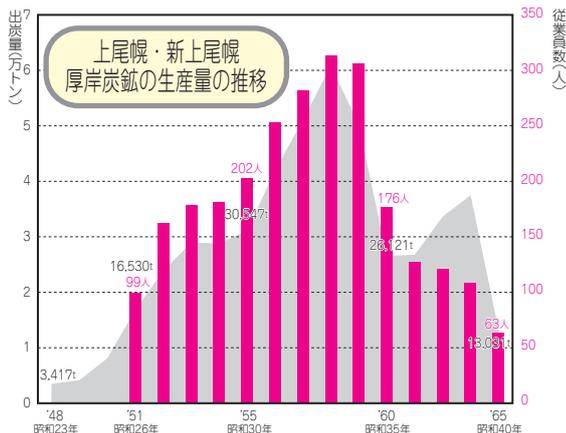
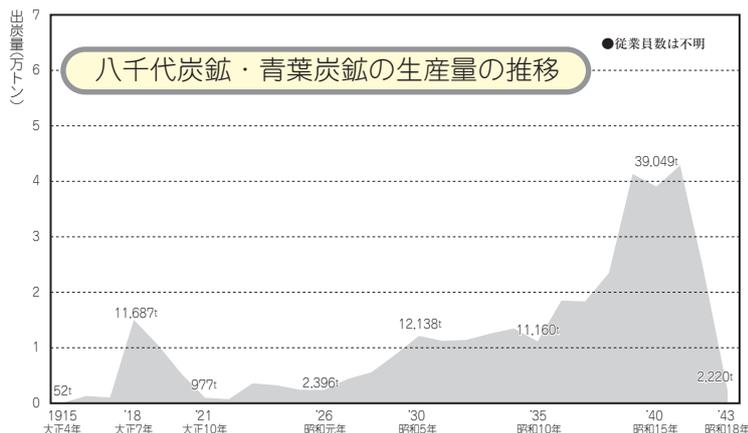
## 軍需景気で活況

昭和に入ると各炭砒とも100人以上の人員体制になり、機械も導入されるようになりました。昭和6（1931）年の満州事変に始まる戦争拡大は、軍需産業を刺激して好景気をもたらし、採炭量も増え上尾幌炭砒の全盛時代が到来しました。11（1936）年頃には王子製紙が日東炭砒を、日本特殊鋼管が青葉炭砒を、太平洋炭砒が新尾幌・八千代炭砒を経営し、上尾幌の人口が急増するとともに飲食店や床屋・診療所ができ、小学校の児童数も800人を超えました。18（1948）年から19（1949）年にかけて、第二次世界大戦の激化により海上輸送が困難になったこともあり、中小炭砒の整理による生産の集中が行われ、砒員の大部分は芦別や九州の炭砒へ移動命令が出て、上尾幌地区の全炭砒が休坑しました。

## 戦後好景気から衰退へ

終戦後、各炭砒は自家用の暖房用炭を細々と採炭し始め、昭和23（1948）年、八千代炭砒は新八千代炭砒として発足し、この頃から全山の出炭量も3万トンから6万トンへと増加していきました。25（1950）年の朝鮮戦争による特需は、黒いダイヤの好景気をもたらし、人口約2,000人という第二の炭砒全盛期を迎えました。

石炭産業は斜陽化の時代を迎え衰退していきました。昭和30（1955）年、石油鉱業合理化臨時措置法により石炭鉱業合理化作業団の設置により採掘権・諸設備の買収が行われるようになり、その中で厚岸町内の炭砒はいわゆる「スクラップアンドビルド」政策のスクラップ対象となりました。小ヤマの多い上尾幌・尾幌地域の炭砒は、35（1960）年ころから42（1967）年までに全山を閉山となりました。また、20（1945）年に操業を再開した糸魚沢炭砒も一時は従業員約120人、日産30トンを産出しましたが、35（1960）年頃には閉山しました。（熊崎 農夫博）



# 釧路コールマイン



現在のSD採炭切羽



坑道掘進に活躍するコンテナアスマイナー (CM)



「石炭列車」は選炭工場から知人貯炭場へ

## 日本唯一の坑内掘り炭鉱

### 釧路の炭鉱技術は世界へ

国内炭の段階的縮小という石炭政策により、平成に入っても、円高やコスト上昇も相まって炭鉱の閉山は続きました。平成7(1995)年の空知炭鉱(歌志内市)の閉山により、北海道内の坑内掘り炭鉱は太平洋炭鉱のみとなりました。

機械化、保安・労働環境の改善などさまざまな先進的取り組みで生産を続けた太平洋炭鉱でしたが、ついに平成14(2002)年1月30日、閉山を迎えます。その直前、13(2001)年11月には九州最後であった池島炭鉱(長崎県)が閉山しています。

「炭鉱(ヤマ)の灯を消すな」。太平洋炭鉱を引継ぐため、平成13(2001)年末に地元資本による新会社「釧路コールマイン」が設立されました。鉱区を縮小、海拔-322mよりも浅い場所での社員約500名・年間70万トン体制での生産と、13年度から一部開始されていた国の「炭鉱技術海外移転事業」の受託、新事業の開発を目的としています。

そして平成14(2002)年4月、生産再開。日本唯一の坑内掘り炭鉱、釧路コールマインとして新たなスタートを切りました。

現在は年間約55万トンが生産され、主にJ-POWER(電源開発)や北海道電力の石炭火力発電所、その他工場、わずかですが家庭用暖房炭としても使われています。また「炭鉱技術海外移転事業」の後継である「産炭国石炭産業高度化事業」を受託実施しています。

同事業では、ベトナムや中国などの炭鉱技術者が釧路に、そして両国へ釧路の炭鉱技術者が派遣され、これまでの経験と技術の蓄積を活かし、「現場主義」そして「保安第一」の炭鉱技術を伝え、それは内外で高い評価を得ています。平成22(2010)年度まで、1,725人の研修を受け入れ、釧路から延べ1,332人の技術者が派遣されています。

### 古くて新しいエネルギー、石炭

石炭といえば、蒸気機関車に石炭ストーブを思い出す人も多いでしょう。モクモク煙を吐いて…石炭は「過去のエネルギー」と思っている人も少なくありません。

いえ、実はそうではありません。私たちの便利な生活に、石炭も大きな役割を果たしています。電力の約4分の1は、石炭火力発電所によるものです。また製鉄、セメントほかさまざまな産業でも大活躍しています。露天掘りと坑内掘りをあわせて、国内炭の生産量は年115万トン(平成22年度)ですが、その150倍以上の1億8000万トンもの石炭を、日本はオーストラリアやインドネシアなどから輸入しています。石炭は世界各地に分散して賦存し、かつ埋蔵量が豊富であることから、安定した資源であるという特徴があります。

一方、石炭は石油や天然ガスに比べ、燃焼時の単位エネルギーあたりのCO<sub>2</sub>(二酸化炭素)発生量が多いなど環境負荷が大きいことが欠点ですが、それを解決する技術開発・実用化が進められています。

日本の石炭火力発電所は諸外国に比べ効率が良いのですが、さらなる効率向上とCO<sub>2</sub>削減に向け、石炭をガス化しガスタービンと蒸気タービンで2度発電する石炭ガス化複合発電(IGCC)、燃料電池を組み合わせた石炭ガス化複合発電(IGFC)、また燃焼時のCO<sub>2</sub>を回収し地下へ閉じ込める技術(CCS)、石炭層ガスの開発(CBM)、石炭の地下ガス化(UCG)などの開発と実用化がすすめられています。これら環境に配慮した石炭技術は「クリーンコールテクノロジー」と呼ばれ、日本はその先進国として、新興国を中心に世界から注目が集まっています。

(石川 孝織)

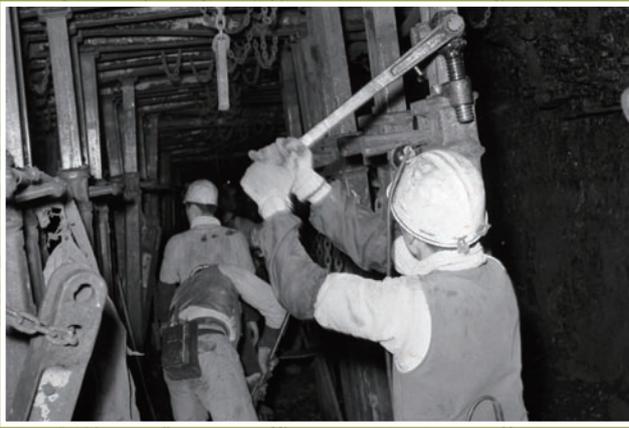


坑内での研修(ベトナム人炭鉱技術者へ)



ベトナムでの鉱山救護隊研修

# ヤマのつばと



摩擦鉄柱の締め上げ（太平洋炭砒・昭和30年代）



浦幌炭砒太平坑での急傾斜採炭（昭和26/1951年）



入坑進発所前にて（雄別炭砒・昭和43/1968年頃）



斜坑を上ってきた炭車（庶路炭砒・昭和30年代）



「雄別にはズリ山がない」…ズリは山の裏側へ（雄別炭砒・昭和44/1969年頃）



坑外人車で出勤風景（太平洋炭砒・昭和40/1965年頃）



ロックボルト現場（太平洋炭砒・平成3/1991年）

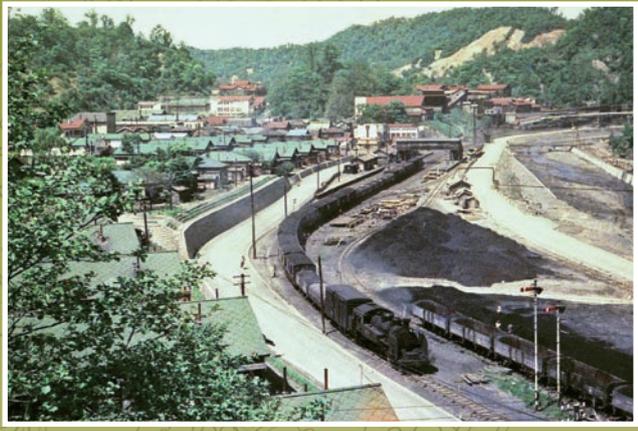


入坑風景（太平洋炭砒・平成3/1991年）

# ヤマのくらし



盆おどり (太平洋炭砒・昭和30年代)



山の手職員合宿前から雄別炭山駅方向  
(昭和44/1969年)



坑口浴場 (太平洋炭砒・昭和49/1974年)



炭鉱住宅街で遊ぶ子どもたち  
(太平洋炭砒・昭和35/1960年頃)



山神祭 協和会館前にて (雄別炭砒・昭和40年代)



運動会での車輪挙げ  
(太平洋炭砒グラウンド・昭和30年代)



子どもたち (庶路炭砒・昭和30年代)



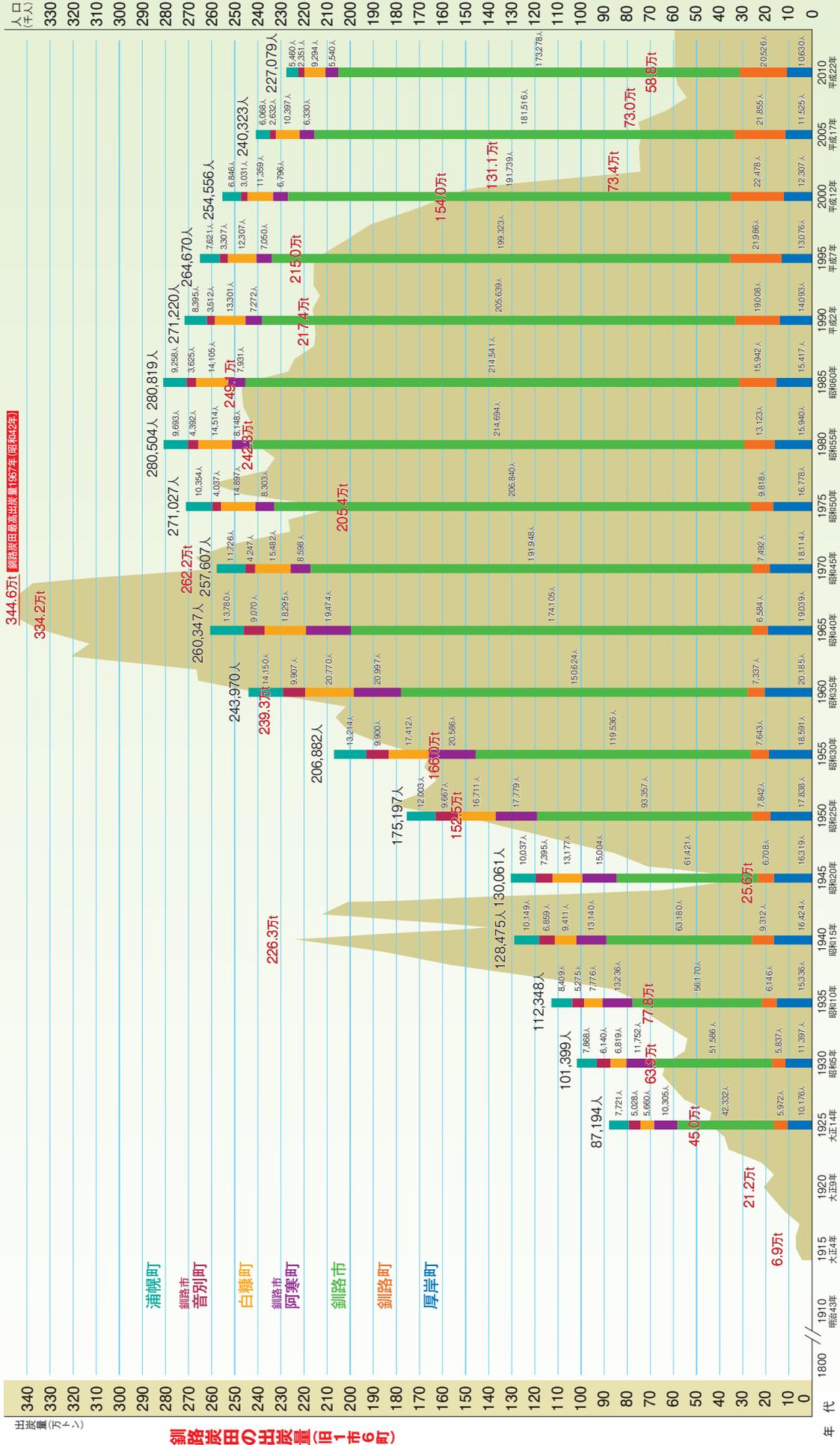
第51回メーデーでのデモ行進  
(釧路市内・昭和55/1980年)

# 釧路炭田年表

和暦	西暦	できごと
天明元	1781	松前長広「松前志」に「タキイシ 此物東部クスリヨリ出ツ」との記録
安政3	1856	〔釧路市〕「開拓使事業報告」（明治30年）に、「安政3年、幕府は初めて釧路瀬津内 <sup>ノツツナイ</sup> で煤炭を採掘し、幾許もなくして止む。」との記録
安政4	1857	〔白糠町〕石炭岬での石炭採掘が始まり、茅沼（現 岩内町）へ移動するまで7年間続く
明治4	1871	〔釧路市〕工部省は瀬津内での採炭を再開（伊万里藩による）
6	1873	榎本武揚が釧路地方の資源を調査、炭層が海底へ傾斜すること、港湾の不備などを指摘
7	1874	開拓使に雇われていたアメリカ人地質学者、B.S.ライマンが道内調査の一環として釧路地方を踏査
20	1887	〔釧路市〕山田朔郎、春採での石炭試掘を出願、アトサヌプリでの硫黄製錬用燃料として、安田善次郎が買収し「春鳥炭山」とする
26	1893	〔釧路町〕別保で炭層が発見され、明治29年に山縣炭鉱となる
28	1895	〔釧路町〕大阪鉱業、別保に鉱区設定、採炭を開始
30	1897	〔白糠町〕肥田照作が刺牛地区ブシナイ付近で開坑、ほか明治30年代にはいくつかの炭鉱が開坑したが断続的
38	1905	〔釧路市〕安田炭鉱（明治34年に春鳥炭山から改称）、春採で堅坑を建設
39	1906	〔釧路町〕大阪鉱業が別保の山縣炭鉱を買収
大正3	1914	〔釧路市〕安田炭鉱が閉山し、安田商事釧路支店も閉鎖
5	1916	〔釧路町〕三井鉱山が別保炭鉱を買収、「三井鉱山釧路炭鉱」とする
6	1917	〔釧路市〕木村久太郎、安田炭鉱を20万円で買収、「木村組釧路炭鉱」として事業開始
6	1917	〔厚岸町〕釧路-厚岸の鉄道開通を機に、旭炭鉱・八千代炭鉱が開坑
8	1919	〔白糠町〕開北炭鉱が加里庶炭鉱（大正3年開坑）を買収、大正末期に南昌洋行の経営に移る
9	1920	〔釧路市・釧路町〕木村組釧路炭鉱と三井釧路炭鉱が合併、太平洋炭鉱株式会社設立
9	1920	〔阿寒町〕「北海炭鉱鉄道株式会社」雄別で開坑作業、雄別～釧路の鉄道敷設着手
12	1923	〔釧路市〕釧路臨港鉄道株式会社設立、大正14年、春採～知人開通
13	1924	〔阿寒町〕北海炭鉱鉄道、三菱鉱業の子会社となり「雄別炭鉱鉄道株式会社」と社名変更
昭和3	1928	〔音別町〕雄別炭鉱鉄道、北日本鉱業から尺別炭鉱を買収
11	1936	〔浦幌町〕雄別炭鉱鉄道、大和鉱業から浦幌炭鉱を買収
13	1938	〔阿寒町〕雄別炭鉱鉄道、雄別通洞が開通する、苔樋地区採掘開始
14	1939	〔白糠町〕明治鉱業が庶路炭鉱を開坑
17	1942	〔浦幌町・音別町〕尺別炭鉱と浦幌炭鉱をつなぐ尺浦隧道が開通し、浦幌からの石炭輸送が増強される
19	1944	〔樺太及釧路に於ける炭鉱勤労者、資材等の急速転換の件〕が閣議決定され、各炭鉱は休・保坑、6千人の労働者が九州へ転換
20	1945	終戦により、各炭鉱保・休坑が解除され生産再開へ、労働者も九州各炭鉱より帰還
20	1945	各炭鉱で労働組合が結成
21	1946	〔釧路市・釧路町〕前年組織された鉱員・職員両労働組合が合同「太平洋炭鉱労働組合」発足（職・労一本）
21	1946	〔阿寒町・音別町・浦幌町〕雄別炭鉱鉄道、財閥解体により三菱鉱業株式会社の傘下から分離独立
22	1947	〔釧路市〕太平洋炭鉱、春採坑左本坑道第一卸のダムを越え海底下への採掘に着手、興津坑には新鋭輸入機器、カッター、ローダー、シャトルカーを投入し機械化採炭をスタート
24	1949	〔釧路町〕太平洋炭鉱別保坑閉山、設備、人員を春採・興津両坑に集約
26	1951	炭労、賃金闘争で無期限スト突入（63日スト）、釧路の各炭鉱も
29	1954	〔浦幌町〕浦幌炭鉱閉山
29	1954	〔釧路市〕太平洋炭鉱春採坑二卸左八片掘進現場でガス爆発が発生、39名死亡
32～ 34年頃	1957 ～59	〔釧路市〕太平洋炭鉱、コンテナアスマイナー・レペパホーベル・ドスコマイナー・シャトルカーなどの機械を積極的に導入
34	1959	〔阿寒町〕雄別炭鉱鉄道、鉄道部門を分離、「雄別鉄道」設立、雄別炭鉱鉄道は「雄別炭鉱」に
35	1960	〔白糠町〕明治鉱業庶路炭鉱でガス爆発事故、18名死亡
37	1962	〔釧路市〕太平洋炭鉱「社員持家制度」発足
39	1964	〔白糠町〕明治鉱業庶路炭鉱閉山
39	1964	〔白糠町〕雄別炭鉱、上茶路炭鉱を開坑
39	1964	〔阿寒町〕雄別炭鉱、出炭72万6千トン/年、開坑以来の最高記録達成、従業員1241人、出炭能率49.5トン/人・月
40	1965	〔釧路市〕太平洋炭鉱「身分制解消」を宣言、職員・鉱員の二元的人事管理を改正
40	1965	〔厚岸町〕青葉炭鉱が閉山し、町内から炭鉱がなくなる
42	1967	〔釧路市〕太平洋炭鉱、シールド枠（S）とドラムカッター（D）による「SD採炭方式」の開始
43	1968	〔釧路市〕太平洋炭鉱・同労組、福利の自治を目指し「太平洋炭鉱福祉組合」設立、翌年レジャー施設「太平洋スカイランド」オープン
44	1969	〔白糠町〕明治鉱業本岐炭鉱閉山
45	1970	〔阿寒町・音別町・白糠町〕2月、雄別鉄道を合併、雄別炭鉱鉄道と社名を戻し「企業ぐるみ閉山」、雄別・尺別・上茶路各炭鉱閉山。この年、釧路市内を除く釧路炭田から炭鉱が消える
45	1970	〔釧路市〕太平洋興発から石炭生産部門が分離、太平洋炭鉱は石炭採掘専業会社となる
53	1978	〔釧路市〕太平洋炭鉱、昭和52年度の出炭、史上最高記録260万9千623トンを達成
55	1978	〔釧路市〕太平洋炭鉱創立60周年、記念式典、60年史発行、社歌制定、炭鉱展示館の建設などが行われる
平成元	1989	〔釧路市〕太平洋炭鉱、春採斜坑が完成し集団ベルトで原炭運搬一元化
5	1993	〔釧路市〕太平洋炭鉱、百万人当たり災害率「5」達成
12	2000	〔釧路市〕存続願い「山神かがり火まつり」はじまる（桜ヶ岡商店街）
13	2001	〔釧路市〕太平洋炭鉱で国の「炭鉱技術海外移転事業」一部実施（翌年度より本格実施）
14	2002	〔釧路市〕太平洋炭鉱、1月9日最後の採炭、1月22日労使閉山正式調印し30日閉山
14	2002	〔釧路市〕前年末に設立された釧路コールマイン、4月より出炭開始、「炭鉱技術海外移転事業」も受託継続
19	2007	〔釧路市〕国の「炭鉱技術海外移転事業」は「産炭国石炭産業高度化事業」として継続

上記の市・町は、釧路市・阿寒町・音別町合併（平成17/2005年）以前としています

# 釧路炭田の出炭量と釧路機構(旧1市6町)の人口推移



・人口は国勢調査による  
 ・平成22(2010)年の人口は、平成17(2005)年の釧路市・阿寒町・音別町合併以前の旧1市6町に分けて示しています

## ■ 発行にあたって

我が国は、火力発電所などで使用される石炭のほぼ全量を海外から輸入していますが、かつて国内炭は、戦後の経済復興の牽引力を果たしていた時代があり、道東に位置する釧路炭田の各炭鉱も一翼を担い、同時に市町村のまちづくりや住民生活を支えていました。

しかし、活気にみなぎっていた釧路炭田の各炭鉱も高コストの課題などから脱却できず、国のエネルギー政策の転換により昭和40年代までに次々と閉山を余儀なくされていきました。

現在、残っている炭鉱は、平成14年に閉山した太平洋炭鉱の一部鉱区を引き継いだ釧路炭鉱（釧路コールマイン）のみとなり、これは国内唯一の坑内掘り稼働炭鉱でもあります。

閉山した炭鉱は、歳月の経過とともに住民の記憶から消え去りつつあり、若い世代は住んでいるところに炭鉱があったことさえ知らないのが実情ではないでしょうか。

このようなことから、隆盛を誇った在りし日の炭鉱を再認識していただくとともに、炭鉱技術の再評価の契機として頂くため、平成15年に改訂した「釧路炭田産炭史」を全面的に見直し、発行することとしました。

本冊子の作成にあたっては、釧路市立博物館の石川孝織氏をはじめ炭鉱所在の市町職員、炭鉱OB、郷土史研究家の方々の協力と多くの資料を提供していただいたことに厚くお礼申し上げます。

## 釧路炭田産炭史

編者 石川孝織・佐藤富喜雄・坂田 元・松下泰夫  
著者 佐藤芳雄（浦幌町教育委員会）・市橋大明（郷土史家）・竹ヶ原浩司（白糠町教育委員会）  
松下泰夫（元 雄別炭鉱）・佐藤富喜雄・坂田 元（太平洋炭鉱管理職釧路倶楽部）  
石川孝織（釧路市立博物館）・久保田康生（釧路町産業経済課）・熊崎農夫博（厚岸町海事記念館）

発行日 平成23（2011）年11月11日  
発行 社団法人北海道産炭地域振興センター 釧路産炭地域総合発展機構  
北海道釧路市錦町4丁目7 錦町駐車場ビル 電話 0154-25-4343  
印刷 株式会社藤プリント